

大阪・関西万博開催に向けた意見

御所属 大阪大学 総長

御名前 西尾 章治郎 様

1. 2025 年の大阪・関西万博に何を期待しますか。

(是非すべきこと、また、するべきではないこと、後世に残すべきもの等)

●【「いのち」に「むきあう」研究】

大阪大学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとし、また、2018 年 1 月に全学的な組織である「社会ソリューションイニシアティブ (SSI)」を立ち上げ、「いのち」に「むきあう」とともに、「いのち」を「まもる」、「はぐくむ」、「つなぐ」という視点から、社会にインパクトのある教育研究を進めている。さらに、指定国立大学として、研究力の向上、人材の育成、社会との共創 (Co-creation) を目標に掲げており、最先端の科学技術の成果や可能性を提供するだけでなく、社会課題に対するさまざまな取組を進め、世界の人びとと共に「いのち輝く未来社会のデザイン」を構想することに関して貢献できると確信している。

●【大阪・関西万博へのマイルストーン】

ワールドマスターズゲームズが、アジアで初めて関西で開催される 2021 年、大阪大学は創立 90 周年、大阪外国語大学は創立 100 周年を迎える。そして、2024 年の「うめきた 2 期」のまちびらき、2025 年の大阪・関西万博へとバトンがつながり、大阪・関西が大きく盛り上がることを期待する。

●【世界の人びとと課題を共有する万博】

大阪・関西万博は、「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマのもと、「いのち」とは何か、それが「輝く」とはどういうことか、そして「いのち輝く未来社会」を実現するためには何をなすべきかという、人類が問うべき根源的課題を、世界に投げかけ、世界の人びとと共有し、検討していく万博にすべきと考える。そのために、情報技術や映像技術、医療技術など、最先端の科学技術を見たり、体験したりするだけではなく、それを使ってどのような社会課題が解決されるのか、そして解決のためには、技術以外の面、つまり人間と社会の面で何が求められるかを、来場者と共に考えていくことも検討してはどうか。

●【挑戦すべき取組】

以上のような観点から、万博において挑戦すべき取組として、以下の二つを提案する。

- (1) 「いのち」をまもり、はぐくみ、つなぐための最先端の科学技術を紹介し、体験してもらう取組
- (2) 「いのち」について世界の人びとと共に考え、対話し、未来社会を構想する取組

●【万博のレガシー「大阪いのち宣言」】

これら二つの取組を通じて、最終的には、いのち輝く未来社会を実現するための方策をとりまとめた「大阪いのち宣言」を策定し、世界に発信する。そして、この「大阪いのち宣言」を、万博後の日本および世界各国における (SDGs を含む) 諸活動の指針としての役割を果たすものとして、大阪・関西万博のレガシーとしてはどうか。

2. 大阪・関西万博で見せるべきコンテンツは何でしょうか。

(例：最先端技術の実証、SDGs 達成への貢献、ライフサイエンス分野との連携等)

●【会場に 1 回行くと 1 年健康寿命が延びる!?!】

上記 1 の取組 (1) については、「いのち」の視点から Society 5.0 を成熟させること、また SDGs を達成することを意識しつつ、情報技術や映像技術、医療技術などの最先端の科学技術を展示す

るとともに、来場者に体験してもらう。

- ・例えば、大阪大学が長年取り組んできた医療・健康分野での最先端技術を用いて、来場者のパーソナルデータを活用して、熱中症の対策を講ずるといったことも可能になるが、そこでは、データを安全・安心に活用していくための社会的なルール作りが重要となる。このため、この万博において、データに関する社会的課題を解決するためのルール作りを行い、それを世界標準としていくことにより、大阪・関西万博のレガシーとしてはどうかと考える。
- ・大阪・関西万博では、テクノロジーを活用し、インターネット上の仮想会場であるバーチャル会場によって、誰でも仮想体験を可能にするということが謳われているが、実際に会場に足を運んでいただくことも重要である。未来社会や最先端技術を体験することがどのようなベネフィットをもたらすのか、例えば、「会場に1回行くと1年健康寿命が延びる!？」といったわかりやすいメッセージを発信することができれば、興味を持ってもらえるのではないかと考える。

●【市民との「共創」】

上記1の取組(2)については、「いのちとは何か」についての哲学的な議論、いのちを輝かせることができる未来社会の構想、そのために解決しなくてはならない諸課題について、世界各国のオピニオン・リーダー、研究者、実践者、一般市民を招いて新たな取組を行い、世界に向けて情報発信することなどが考えられる。

- ・例えば、これまでの有識者による一般的な「シンポジウム」から、市民との「共創の場」へとシフトさせ、万博の観客にプレーヤーとして参加してもらい、数ヶ月にわたる会議の複数回開催や、情報技術の活用による世界同時会議などを行い、情報を提供された一般市民による熟議を経た提案の作成を行う。
- ・開催事例（手法候補）としては、以下のようなものが考えられる。
 - ◇フューチャー・デザイン（大阪大学発、多くの自治体で実施事例あり）
仮想的に将来世代の視点に立つ、バックカasting討議手法
 - ◇World Wide Views など（欧州発、地球環境問題等で複数の実施事例あり）
世界共通討議フォーマット、資料に基づく世界同時開催市民会議

3. 会場計画及びインフラ整備について、新たなアイデアや御意見をお願いします。

（例：会場のデザイン、水面や緑地の利活用、待ち時間のない万博とするための手法、災害対策、暑さ対策等）

●【地球温暖化対策のモデルとなる会場を】

会場の設備について、夢洲をメイン会場としつつ、関西広域にさまざまなイベントや連携会場（サテライト）を設け、地域の特徴を活かした万博にすべきだと思う。会場の設備については、会場全体のゼロカーボン（ゼロエミッション）化、スケルトンインフィル方式の会場建物、猛暑災害への対策など、地球温暖化対策のモデルとなるよう工夫すべきである。特に、万博終了後に取り壊すパビリオンを建てるのではなく、終了後も利用できる建物を、景観を壊さないように建て、テーマに合わせた活動が社会の様々なステークホルダーを巻き込んで継続するよう、配慮すべきである。

4. そのほか、御自由に御意見をお願いします。

●【企画段階から若者に】

「未来社会をデザイン」することを謳っていることから、未来を担う若者の声を反映させた万博にすべきである。万博の企画段階から、中学生、高校生、大学生に積極的にかかわってもらうこととしてはどうか。目指すべき未来社会のイメージ、そこから導かれる解決すべき社会課題、それらを解決するためのアイデア、そして具体的なイベントや建物などを、若者たちから提案してもらい、その実現をおとなたちが支援する、という形をとることで、世代枠を超えたイベントになるだろう。